

広島県三次市方言の推量関連表現

日高水穂（関西大学）

1. 広島県三次市方言の推量関連表現の注目点

本発表では「推量表現 共通調査項目」による調査に基づき、広島県三次市方言の基本的な推量表現形式ジャーロ形およびoR形（いわゆるウ・ヨウ形）の用法について述べたうえで、推量関連表現としてジャーナーカとその省略形ジャーナーおよびジャーと、山口方言の文末詞ジャとの比較を試みる。

広島県三次市方言では、推量表現および推量関連表現として以下の表現が使用される（動詞「行く」を前接する形で示す）。

- ① 断定形+ジャーロ形：{イク/イッタ} ジャーロ
- ② oR形：イコー/イッタロー
- ③ oR形+ジャーナーカ：{イコー/イッタロー} ジャーナーカ
- ④ 断定形+ジャーナーカ：{イク/イッタ} ジャーナーカ

①のジャーロは「だろう」に相当する形式である。②の非過去oR形（イコー）は、意志形と同形であり、単独では意志の意味が強く表れるため推量表現としては用いにくい。過去oR形（イッタロー）は意志の意味が現れないため単独でも推量表現として使用可能である。また、oR形は、③のようにジャーナーカを後接すると推量の意味が補強され、この場合、非過去oR形も推量の意味で用いることができるようになる。ジャーナーカは「ではないか」に相当する形式であるが、標準語の「行こうではないか」が意志・勧誘の意味になるのに対し、この方言の「oR形+ジャーナーカ」は推量表現としても用いられ、またイコージャーのようにナーカを略した表現も可能である点が標準語の「ではないか」とは異なる。

この方言のジャーナーカは、標準語の「ではないか」と同様に、断定形に後接する④のような用法も持つ。④は推量ではなく、確認要求の表現となるが、特筆すべきは、この場合もイクジャーのような省略形を用いることができる点である。このジャーは、山口方言の文末詞ジャ（船木 2001）と機能が近いが、山口方言のジャが上昇音調をとるのに対して、下降音調をとる点でナーカを省略した形であるという由来を維持しており、ここに「ではないか」相当形式が文末詞化する文法化の過程を観察することができる。

2. 先行研究

2.1. 広島県三次市方言の意志・推量形式

まず、小西（2017）の活用表と本文の解説から、広島県三次市方言の意志・推量形式を整理して示す。

表1 広島県三次市方言の意志・推量形式（小西 2017 より）

| | 動詞「書く」 | 形容詞「赤い」 | 形容名詞述語「静かだ」 | 名詞述語「学生だ」 |
|---------------|----------------|-------------------|------------------------------|-----------|
| 意志 | カコー | | | |
| 推量 | カコー※ カクジャロー | アカカロー アカエージャロー | シズカジャロー シズカナカロー シズカナロー | ガクセージャロー |
| 否定推量・ 否定意志 | カクマー | | | |

※を付したカコーのような形（非過去 oR 形）については、「単独では用いにくく、終助詞を伴う形で現れる。終助詞が意志・推量の意味の区別を助けているものと思われる。」として、以下のような例文があげられている。

- ・ハナコモ ソノ バングミュー {ミヨーテ/ミルジャロー (テ)}。(花子もその番組を見るだろう (よ。))
- ・ハナコガ モースグ ココエ {コーデ/クルジャロー (デ)}。(花子がもうすぐここに来るだろう (よ。))

後述する本発表の三次市方言話者は、oR 形の推量の意味を補強する形式として、上記の例文に見られる終助詞テのほか、ジャーナーカを用いるが、この表現はカを省略したジャーナーや、ナーカを省略したジャーの形でも用いられる。ナーカを省略したジャーは、一見すると終助詞のようにも見えるが、隣接する山口方言では実際に、同様の機能をもつ終助詞ジャの使用が確認される。

2.2. 山口方言のジャについて

山口方言には断定辞のジャとは別に文末詞ジャがある。船木 (2001) は、「山口方言の文末のジャが標準語の「ではないか」「じゃない(か)」(田野村 1988 の第 I 類)にほぼ置き換えられる場合、暫定的にこれを文末詞とし、文末詞ジャの生起する文環境について、以下のような特徴を指摘している。

①接続面の特徴:文末詞ジャは体言だけでなく形容動詞、形容詞、動詞、助動詞などの用言にも後接し、文の末尾に位置する。なお、山口方言の文末詞ジャは、標準語のジャーナカは共起しない推量の助動詞ジャロウ/ウ・ヨウとも共起する。

- ・体言：おっ、誰かと思ったら○○さんジャ↑。(○○さんじゃないか)
- ・形容詞：どうしたの、ずいぶん顔が白いジャ↑。(白いじゃないか)
- ・動詞：ほお、金賞か。おまえもやるジャ↑。(やるじゃないか)
- ・助動詞：多分あいつは {打つジャロージャ/打トージャ} ↑。(打つだろうよ、ねえ)

②用言とはいっても、ジャは命令、依頼、意志、勧誘などのデオンティックな表現とは共起しない。

- ・命令：*おまえが行けジャ。(＊行けじゃないか)
- ・依頼：*百円貸してくれジャ。(＊貸してくれじゃないか)
- ・意志：*よし、僕が行コージャ。(行こうじゃないか)

・勧誘：*一緒に行こーじゃ。(行こうじゃないか)

③音調面の特徴：体言に文末詞ジャが接続する場合には、文末イントネーションが上昇(↑)、上昇下降(↑↓)のどちらかとなり、下降(↓)にはならない。

文末詞ジャが上昇となるか上昇下降となるかは意味によってきまり、例えば(a)A1は上昇下降、(a)A3は上昇となるが、その逆は不自然に感じられる。

(a) A1: 去年の球技大会の時、焼き肉を食べたジャ↑↓。(食べたじゃないか)

B2: そうだったっけ?

A3: ええ、忘れちゃったの? 「炭屋」で食べたジャ↑。(食べたじゃないか)

なお、推量の助動詞ジャロウ/ウ・ヨウに文末詞ジャが後接する場合、上昇イントネーションは共起するが上昇下降イントネーションは共起しない。これにも、文末詞ジャとイントネーションのそれぞれの意味が関わっていると思われる。

(b)*A1: 次の打席であいつはヒットを{打つジャロージャ/打トージャ} ↑↓。

B2: そうかなあ? あいつ、今日は調子悪そうだよ。

A3: いや、あいつならきっと {打つジャロージャ/打トージャ} ↑。(打つだろうよ、ねえ)

(船木 2001: 100-101, 一部省略・例文番号を改変)

上記の記述は、山口県出身の発表者の内省にも概ね一致するが、異なるのが推量形式に後接するジャ(発表者はジャー)の音調が下降調になる点である。

・多分あいつは {打つジャロージャー/打トージャ} ↓。

この違いは、以下で観察する広島県三次市方言話者のジャーの音調との比較により、段階的な言語変化の過程を示す現象として理解される。

3. 調査結果

【調査概要】

・実施：2024年1~3月

・調査方法：対面およびオンラインによる面接調査。共通調査項目の例文の方言翻訳式。

・調査協力者(話者A)：広島県三次市出身(18歳まで在住)の女性1名(1942年生まれ、調査時81歳)

※ 補助的に、発表者(話者B)(山口県柳井市出身(18歳まで在住)、1968年生まれ)のデータも参照する。

※ 例文は共通調査項目の例文番号を[1]と示す。また、調査の際は問題となる述語形式を中心に方言訳を求めたため、当該の述語形式のみをカタカナ表記で示す。

3.1. 推量用法

話者Aにおいて単独で推量を表す基本的な形式は、ジャロー形とoR形である。oR形は、動詞の非過去形の場合単独では使用しにくいだが、終助詞テ(「よ」相当)や接続助詞ケー(「から」相当)のような後続要素があれば使用できる場合がある。動詞過去形、形容詞、形容名詞述語のoR形は、単独でも使用可能である。

- (1) あの人のはたぶん手紙を {カクジャロー/*カコー/カコーテ (書くだろうよ) /カコーケ (書くだろうから)}。[2]
- (2) [友達から「あの方は昨日役場に行っただろうか」と聞かれ] イッタジャロー/イッタロー。[27]
- (3) この着物はたぶん {タカージャロー/タカカロー}。[18]
- (4) あそこは、車が通らないので、たぶん {シズカジャロー/シズカナロー}。[20]
- (5) あしたはたぶんアメジャロー。[21]

oR 形は、「ではないか」に相当するジャーナーカおよびその省略形のジャーナー、ジャーを後接することにより、推量の意味が補強される。

- (6) あの人のはたぶん手紙をカコー {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。[2]
- (7) [友達から「あの方は昨日役場に行っただろうか」と聞かれ] イッタロー {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。[27]
- (8) この着物はたぶんタカカロー {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。[18]
- (9) あそこは、車が通らないので、たぶんシズカナロー {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。[20]

ジャロー形にジャーナーカ、ジャーナー、ジャーを後接させた形の許容度は低いが、ジャーはほかの2形式に比べると許容される。

- (10) あしたはたぶんアメジャロー {??ジャーナーカ/??ジャーナー/?ジャー}。[21]

(6) ~ (10) のジャーはいずれも、ジャーナーカのジャーと同じ「HL」の音調（文音調としては下降調）をとる。

話者Bは、(1) のような終助詞テを用いない、ジャーナー(カ)がジャンナイ(カ)になる、という違いのほか、単独のoR形はやや許容度が低く、特に(4)のような形容名詞述語のoR形は用いない。また、oR形+ジャンナイ(カ)は推量の意味では使用しない。一方、動詞・形容詞のoR形+ジャーは使用し、ジャロー形+ジャーも自然な表現として使用する。ジャーの音調は下降調である。

3.2. 確認要求用法

話者Aは、ジャロー形、oR形を確認要求でも用いる。ただし、動詞の非過去oR形は、確認要求では用いることができない。

- (11) キュー ツケニヤー ケガ {スルジャロー/*ショー}。(気をつけなければ怪我するだろう?)

- (12) ほら、同級生に高木って {オッタジャロー/オッタロー}。[91]

ジャーナーカ(ジャーナー、ジャー)が断定形に後接する場合は、「じゃないか」相当の確認要求の表現になる。

- (13) キュー ツケニヤー ケガスル {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。(気をつけなければ怪我するじゃないか。)

- (14) ほら、同級生に高木ってオッタ {ジャーナーカ/ジャーナー/ジャー}。[91]

(13) (14) のジャーの音調は上昇調でも下降調でもよい。

話者Bも、ジャロー形、oR形を確認要求で用いる。動詞の非過去oR形を確認要求で用いることができない点も同様である。単独のoR形は、推量用法よりも確認要求用法のほうが許容度が上がる。断定形+ジャーナイ(カ)は標準語的に感じられ、方言会話では使用しない。一方、断定形+ジャーは使用し、ジャーの音調は上昇調のみ可能である。

3.3. 意志・勧誘用法

話者Aは、意志動詞の非過去oR形を、意志・勧誘用法で用いる。意志動詞の非過去oR形にジャーナーカが後接した場合、推量・意志・勧誘のいずれの意味も表せる。ジャーナーが後接した場合は推量の意味になり、意志・勧誘の意味では用いることができない。ジャーが後接した場合は推量・勧誘の意味になり、意志の意味では用いることができない。

(15) よし、私が{イコー/イコージャーナーカ/*イコージャーナー/*イコージャー}。

[105]

(16) 今度ご飯でも食べに{イコー/イコージャーナーカ/*イコージャーナー/イコージャー}。[106]

(16) のような勧誘表現に用いられるジャーの音調は下降調である。

話者Bも、意志動詞の非過去oR形を、意志・勧誘用法で用いる。意志動詞の非過去oR形+ジャーナイ(カ)は、推量の意味は表せず、意志・勧誘の意味となる。ただし、この表現は標準語的に感じられ、方言会話では使用しない。一方、非過去oR形+ジャーは推量の意味になり、意志・勧誘の意味では用いることができない。

3.4. まとめ

以上により、広島県三次市方言話者Aと山口方言話者Bの推量関連表現の適格性を比較すると、表2のようなになる(動詞における当該形式の単独使用の場合の適格性を示す)。

表2 推量関連表現の意味・用法ごとの適格性の比較

| 推量関連表現 | 話者A(広島・80代) | | | | 話者B(山口・50代) | | | |
|--------------------|-------------|------|----|----|-------------|------|-----|-----|
| | 推量 | 確認要求 | 意志 | 勧誘 | 推量 | 確認要求 | 意志 | 勧誘 |
| ①ジャロー形 | ○ | ○ | × | × | ○ | ○ | × | × |
| ②動詞非過去oR形 | × | × | ○ | ○ | × | × | ○ | ○ |
| 動詞非過去以外のoR形 | ○ | ○ | × | × | △ | ○ | × | × |
| ③oR形+ジャーナーカ/ジャーナイカ | ○ | × | ○ | ○ | × | × | (○) | (○) |
| oR形+ジャーナー/ジャーナイ | ○ | × | × | × | × | × | (○) | (○) |
| oR形+ジャー | ○ | × | × | ○ | ○ | × | × | × |
| ④断定形+ジャーナーカ/ジャーナイカ | × | ○ | × | × | × | (○) | × | × |
| 断定形+ジャーナー/ジャーナイ | × | ○ | × | × | × | (○) | × | × |
| 断定形+ジャー | × | ○ | × | × | × | ○ | × | × |

○：自然 △：やや不自然 ×：不自然 (○)：自然だが標準語的

また、話者A、話者Bのジャーおよび船木（2001）のジャの音調を比較して示すと、表3のようになる。

表3 ジャー（ジャ）の音調の比較

| | 話者A（広島・80代） | 話者B（山口・50代） | 船木（2001）（山口） |
|---------|-------------|-------------|--------------|
| oR形+ジャー | 下降調 | 下降調 | 上昇調 |
| 断定形+ジャー | 下降調・上昇調 | 上昇調 | 上昇調 |

古典語の助動詞「む」まで遡れば明らかのように、広島・山口方言でもかつては、語彙的な制限なく、意志・推量の両方をoR形によって表していたと考えられる。ところが、意志動詞の非過去oR形が意志の意味に片寄るようになり、推量はジャー形式もしくはoR形にジャーナーカ（ではないか）を後接する形によって表されるようになった。このジャーナーカは断定形に後接して確認要求を表す一方、カが略されてジャーナー、ナーカが略されてジャーの形でも使用されるようになった。

話者Aはジャーナーカ、ジャーナー、ジャーを併用する段階にあり、ジャーの音調はoR形に後接する場合も断定形に後接する場合も、ジャーナーカのジャーと同じ下降調を維持している。話者Bはジャーのみを使用する段階にあり、ジャーの音調はoR形に後接する場合は下降調であるが、断定形に後接する場合は上昇調のみになっている。話者Bと同様に、船木（2001）もジャのみを使用する段階の記述とみられ、ジャの音調はoR形に後接する場合も断定形に後接する場合も上昇調である。ここで見られるジャー（ジャ）の音調が上昇調に固定していく現象は、この形式が「ではないか」の「では」に由来することが、意識されなくなったことを意味するだろう。

以上のように、広島県三次市方言話者Aと山口方言話者Bおよび船木（2001）の山口方言の記述には、段階的に進む「ではないか」相当形式の文法化の過程が観察される。

4. おわりに

本発表では、広島県三次市方言を中心に、隣接する山口方言の記述を加えて現象の観察を行ってきたが、関東・中部方言のジャン（ジャー）、九州方言のダイ（ダー、ダン）など、「ではないか」に由来すると見られる文末詞には、oR形に後接する例が相当数見られる（藤原1986）。広く全国の諸方言を俯瞰した上で、oR形の意味変化と「ではないか」の文法化の連動関係を明らかにすることを、今後の課題としたい。

参考文献

- 小西いずみ（2017）「要地方言の活用体系記述 広島県三次市方言」方言文法研究会編『全国方言文法辞典 資料集(3)活用体系(2)』科研費研究成果報告書
 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152
 藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究（下）』春陽堂
 船木礼子（2001）「山口方言の文末に見られるジャについて—断定辞のジャと文末詞のジャー」『阪大社会言語学研究ノート』3